

東日流「内・外」三郡誌

ついに出現、幻の寛政原本！

古田武彦
竹田侑子

目次

- 4 まえがき
- 7 年表…「和田家文書」出現から「寛政原本」発見まで
- 13 東日流「内・外」三郡誌寛政原本を解説する 古田武彦
- 91 原本の鑑定結果
鑑定文 国際日本文化研究センター 研究部教授 笠谷和比古
- 95 電子顕微鏡写真
電子顕微鏡写真「東日流内三郡誌安倍小太郎康季 秋田孝季編」
電子顕微鏡写真「寛政五年七月 東日流外三郡誌二百十巻」
電子顕微鏡写真「東日流外三郡誌三百六十二巻 大正四年和田家蔵書（長作）」
電子顕微鏡写真「東日流内三郡誌次第序巻 第一巻（合冊）秋田孝季」
電子顕微鏡写真「第六巻 東日流外三郡誌秋田孝季 文政五年七月 和田長三郎書 注訓一言」
- 107 第一資料 「寛政五年七月東日流外三郡誌二百十巻飯積邑和田長三郎」

169

第二資料

「東日流内三郡誌、安倍小太郎康季、秋田孝季編」

183

第三資料

「付書第六百七十三卷、寛政二年五月集稿、陸州於名取、東日流内三郡誌、秋田孝季、和田長三郎吉次」

207

第四資料

「建保元年七月安東七（「十」か）郎貞季殿之軍牒図ナルモ是ノ原図追書セルハ巴（「己」か）道ナリ東日流外三郡大図文政五年六月二十一日写之和田長三郎源吉次」

217

第五資料

「東日流内三郡誌、次第序卷、土崎之住人、秋田孝季、及び第一卷」

285

寛政原本の筆跡 対比史料

- (一) 「借物・借金証文等（巻物）〈伝。秋田孝季筆〉」（抜粋）
- (二) 「護国女太平記卷十（智）孝季記」（抜粋）
- (三) 「荒木武藝帳」（抜粋）
- (四) 「詩集 瀛奎律髓下 文化乙丑 道中慰讀書 孝季」（抜粋）
- (五) 「第廿、東日流外三郡誌、明治廿九年、和田長三郎末吉」
- (六) 「東日流外三郡誌、九十五卷乃至九十八卷、明治拾年五月六日写、和田長三郎」
- (七) 「東日流外三郡誌、三百六十二卷、大正四年和田家蔵書（長作）」
- (八) 「和田喜八郎（ゆうパツク）一九九六・二〇・一一」

まえがき

一 「わたしは本を持っている。」そう言う人があるならば、その中に不可欠の一書がある。それが本書だ。これは不遜の一語であろう。しかし、あえて語るのは他でもない。今後、この一書なしには、良識ある人は「日本の歴史」を語ることが不可能だからである。

もちろん、古事記や日本書紀、さらに風土記などがあり、以降の各時代の人々はそれらによって「日本の歴史」を理解してきた。自己の歴史教養をかたち造ってきたのだ。だが、それらは歴史の全体像の「一方」に限られていた。「他方」が欠けていたのである。

たとえば、東北地方には東北独自の伝承があり、歴史があった。それはいわゆる「大和中心の歴史」でおおいかくせるものではない。A・B・C・D等、それぞれの地域にはそれぞれを「主人公」とした視点があつた。それぞれの歴史があつた。この自明の事実を、わたしたちは本書の出現によって確認することができた。否、しなければならぬ時点に立ち至つたのである。

二

疑惑や誹謗は多かつた。それはもつともなことだ。「リーズナブル」だったのである。なぜなら、八世紀以来、現代に至るまで、「人間の認識」が近畿天皇家中心の「色つきの目」でしか歴史を見ること

ができぬ。不幸ながら、それがわたしたちの眼界をおおい、さえぎった壁だったからである。しかし、その壁は今崩壊した。

三

必要なのは、事実だけである。もはや、大言も壮語も無用だ。わたしたちはただこの一書を人々の机上におけば、それで用は足りるのである。

後代の人間の来たらん日を信じ、朝夕を資料の収集と記録にそそいだ、十八世紀に生きた秋田考季と妹りく、そして和田長三郎吉次の三者に対し、深い感謝の辞をささげたいと思う。

そして本書の成立に尽くして下さった方々、故人も生者もふくめ、また「リーズナブル」な多くの批言を寄せて下さった方々にも、厚い謝意を表しつつ、本書を今、江湖に贈りたいと思う。

二〇〇八年 四月二十三日 記

古田武彦

年表：「和田家文書」出現から「寛政原本」発見まで（作成・竹田侑子）

年月日		出版本
1947年（昭和22年）	青森県五所川原市飯詰字福泉の和田元市家に於いて、真夜中、天井から大きな挟箱が落ちてきた。天井裏を調べてみると、その他にも鎧箱や船荷箱が麻縄で吊るされていた。（8月）（和田喜八郎弁）	出版本
1948年（昭和23年）	和田喜八郎、魔神山法蔵洞発見。（6月）（藤本光幸ノート「魔神山法蔵洞発掘」No.1より）	
1949年（昭和24年）	<ul style="list-style-type: none"> ・和田元市父子、梵珠連山のある場所から、木皮120枚、銅版48枚等発掘。（福士貞蔵「郷土資料蒐集録」より） ・和田元市父子、梵珠山糠塚沢付近の洞窟より、役行者・金光上人関係資料を発見。（7月）（開米智鎧『飯詰村史』『金光上人』より） 	「郷土資料蒐集録第拾壹號」 福士貞蔵 書写年次 1948～1949年
1950年（昭和25年）	<p>※『東日流六郡誌全』あとがき（和田喜八郎）では、昭和23年夏とする。</p> <p>弘前市長勝寺三門の国重要文化財申請に伴う調査のため黒枝技官来弘。宿泊先弘前市石場旅館に、当時の中谷飯詰村長・助役・開米智鎧住職・和田喜八郎が訪ね、発掘物の鑑定を依頼。黒枝技官より盗品扱いをうける。（7月頃）</p>	
1951年（昭和26年）	開米智鎧、役行者研究を脱稿（1949年）。発刊（1951年）。	『飯詰村史』『藩政前史梗概』：役行者と其宗教 開米智鎧

1956年 (昭和31年)	佐藤堅瑞(柏村淨円寺住職)、飯詰村大泉寺住職開米智鎧より、金光上人関係資料を見せてもらう。	「郷土資料異聞珍談」 福士貞蔵(1956年)
1960年 (昭和35年)		『金光上人の研究』 佐藤堅瑞(1960年1月)
1961年 (昭和36年)	藤崎撰取院住職成田教淳、檀徒佐藤末太郎・加福喜一・藤本光幸、大泉寺を訪ね、住職開米智鎧と和田喜八郎に会う。(秋)	
1963年 (昭和38年)	藤崎町金光山撰取院金光上人750年大遠忌記念事業として『金光上人』を刊行する。(「金光上人」編纂委員会委員長藤本光幸) ・藤本光幸、金光上人資料中に天真名井宮関係記事のあることを知り、喜八郎に資料の提供を求める。 ・宮関係資料の中に安東氏関係資料が混じてくることがあり、安東氏関係資料も提供を求める。	『金光上人』開米智鎧 (1963年9月)
1965年頃 (昭和40年)	和田喜八郎、藤崎撰取院関係者佐藤末太郎・加福喜一・藤本光幸を洞窟に案内する(水沢の窟、金井城の窟)。入口より岩戸遮断地までその先は未踏。(藤本光幸談) ※『東日流六郡誌全』(1987年)の和田喜八郎記事「昭和22年同志4人とともに中山連山の山沢の踏破…」に添付の写真はこの時のもの。 ※昭51年刊『市浦村史資料編中』グラビア写真は、金井窟での藤本。	
1973年 (昭和48年)	和田喜八郎、市浦村日枝神社に「宝剣額」初見。同道者青山兼四郎・市浦村教育委員会の方々。	

1975年～1977年 (昭和50年～52年)	藤本光幸預かりの「東日流外三郡誌」200巻程の中から約100巻を市浦村に貸し出す。(1973年～1975年)	『市浦村史資料編』 上中下巻、年表 (1975年10月～1977年)
1980年(昭和55年)	石塔山神社社殿建立。秋田一季来訪、石塔山に参拝。(9月) ・和田喜八郎、このころからテレビ出演・講演・本の執筆等話題の人となる。 テレビ出演…謎のあらはばき王国(NHK教育) ぐるつと海道3万キロ(NHK総合) みちのく黄金街道(キネマ東京)	『高楯城史跡研究発表』 『東日流蝦夷王国』 和田喜八郎 (津軽書房)
1981年頃 1983年～1986年 (昭和58年～61年)	藤本光幸、大腸閉塞のため入院手術を受ける。 藤本光幸、久保宇芽子の来訪を受ける(安倍晋太郎夫人の依頼により「安倍家系譜」を作成。宗任以前を確認のため)。藤本光幸、和田喜八郎を紹介。和田喜八郎、久保宇芽子著「安倍家系譜」を五所川原市立図書館に寄贈。(1986年)	『東日流外三郡誌』 小館衷三・藤本光幸編 1～6巻(1983年12月) 補巻(1986年12月 北方新社) 『東日流六郡誌絵巻全』 山上笙介編 (1986年 津軽書房)
1987年(昭和62年)	和田喜八郎、「安倍・安東・秋田氏秘宝展」開催。(7月1～8月31) 秋田一季、安倍晋太郎夫妻来訪。石塔山へ参拝。(7月30日)	『知られざる東日流日下王国』和田喜八郎 (1987年7月 東日流中山古代中世遺跡振興会) 『総輯東日流六郡誌全』 山上笙介編 (1987年7月 津軽書房)

1988年 (昭和63年)	古田武彦、石塔山を实地調査。	『東日流外三郡誌』全6巻 東日流中山史跡保存会編 (1989年 八幡書店)
1989年 (平成1年)	和田喜八郎、衣川シンポジウムに出席。(9月)	『五所川原市と東北古代中世史抄』 中山史跡保存会・和田喜八郎 (1989年10月)
1990年 (平成2年)	和田喜八郎、シンポジウム報告書を作成。(3月) 和田家天井裏にあった最後の一箱を公開。藤本光幸、資料集刊行のため、一部を和田喜八郎より借り受ける。(4月)	『東日流六郡語部録』 和田喜八郎編・訳(八幡書店)
1992年 (平成4年)	この冬喜八郎、スノーモビルで右腕骨折。	『東日流六郡誌大要』 東日流中山史跡保存会編 (1990年1月 八幡書店)
1994年 (平成6年)		『和田家資料1』藤本光幸 (1992年8月 北方新社)
1995年 (平成7年)	藤本光幸、心臓疾患のため入院。	『和田家資料2』藤本光幸 (1994年7月 北方新社)
1999年 (平成11年)	・和田喜八郎、入院。(夏) ・和田喜八郎死去。(1999年9月28日) ・藤本光幸・竹田侑子・和田孝(喜八郎長男)・和田章子(喜八郎長女)より、「和田家文書」借り受けの承諾を得る。(12月)	

2000年 (平成12年)	<ul style="list-style-type: none"> ・和田とも子(喜八郎次女)入院手術。(春) ・和田孝入院。(夏)。退院10月。 ・藤本光幸検査入院。(10月) 	
2001年 (平成13年)	<ul style="list-style-type: none"> ・石塔山神社にて、藤本光幸・藤本長伸(光幸長男)。竹田侑子、和田孝・和田章子より文書借り受け。藤本光幸宅へ運ぶ。(9月) ・藤本光幸入院。(10月下旬) ・古田武彦、和田家・石塔山神社調査と「和田家文書」確認のため来訪。藤本光幸入院中のため、竹田が同行。 	
2002年 (平成14年)	和田孝入院、死去。(9月27日)	
2005年 (平成15年)	<ul style="list-style-type: none"> ・藤本光幸、「和田家資料3」北方新社へ入稿。(8月) ・「和田家資料3」1回目校正途中、藤本光幸死去。(10月21日) 	
2006年 (平成16年)	<ul style="list-style-type: none"> ・竹田侑子、兄光幸の仕事を受け継ぐ。 ・『和田家資料3』発刊。(2月) ・藤本光幸家座敷廊下奥書庫に収納されていた文書類の整理中に、一見して寛政原本か、と思える小冊子を見つかる。同書庫内にあった文書等も含めて写真・コピーを古田武彦へ送る。(5月) ・八王子セミナーハウス滞在の古田のもとへ小冊子・天内家文書等を含む実物文書30点余を届ける。(11月10日) ・座敷廊下奥書庫に保管されていた文書類の中から、近世文書と考えられるもの数点を追加送達する。(11月25日) 	『和田家資料3』藤本光幸編 (2006年2月1日 北方新社)

<p>2007年（平成17年）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・石塔山神社で借り受けた文書類の整理中に、要注意書としてチェックしておいた小冊子1冊のあることを思い出し、送る。（2月1日） ・雑誌『なかつた』発刊。（6月） ・『和田家資料4』発刊。（7月） 	<p>『和田家資料4』藤本光幸編 （2007年7月10日 北方新社）</p>
---------------------	--	--

東日流〔内・外〕三郡誌
寛政原本を解説する

解説「東日流外三郡誌・東日流内三郡誌 寛政原本」

一

本書は東日流（つがる）外三郡誌・東日流内三郡誌の寛政原本の全コロタイプ版である。現存のもの、すべてが収録されている。未曾有の出版物と言えよう。（注1 二〇〇七年六月以降に入手した史料を除く。（『なかつた——真実の歴史学』第四号、参照）

従来の論議はいずれも、「本書以前」の領域にとどまっていた。「東日流外三郡誌」と題された活字本、そしてその元となった明治以降の写本、それらについて喋々と論議をされてきた。世上に百論千議が重ねられてきていたのであった。

しかし、今後は違う。事態が一変したのである。今後の論議はこの一書にもとづき、この一書を出発点としなければ、一切の学問的論争として意味を失うのである。

この一書が江湖に出現する意義は、いわば空前未踏と言わねばならぬ。

二

本書の出現は二〇〇六年の十一月十日（金曜日）にさかのぼる。場所は東京都の八王子、大学セミナーハウスであった。翌十一日と十二日の二日間に行われた連続講義（「筑紫時代」）において公開されたのである。

十日の夕刻、竹田元春氏が母堂侑子さんの依頼を受け、持参された数多くの文書類の中に、それがあつた。わたしにとって「見馴れ」た明治写本類の中に、その一点が含まれていたのである。それが

第一

「寛政五年七月、東日流外三郡誌二百十卷、飯積邑和田長三郎」

であつた。次いで十一月中旬、わたしの自宅（京都）へ送られてきた古文書類の中に次の三点があつた。

第二

「東日流内三郡誌、安倍小太郎康季、秋田孝季編」

第三

「付書第六百七十三卷、寛政二年五月集稿、陸州於名取、東日流内三郡誌、秋田孝季、和田長三郎吉次」（ただし、コピー版）

第四

「建保元年七月安東七（「十」か）郎貞季殿之軍牒図ナルモ是ノ原図追書セルハ巴（「己」か）道ナリ
文政五年六月二十一日写之

和田長三郎源吉次（花押）（カラー版）

さらに二〇〇七年二月初旬、送られてきた古文書類の中に次の一点があつた。

第五

「東日流内三郡誌、次第序巻、土崎之住人、秋田孝季、及び第一巻（合冊）」

以上であった。

三

端的に、この五種類の古写本の内容についてのべよう。
第一について。

冒頭の「寛政五年」は、従来の（明治写本及び活字本）東日流外三郡誌においても、もつとも頻出する年度（一七九三）である。「寛政原本」の中心年時の一と言えよう。

「二百十卷」は、第二百十巻の意である。

「和田長三郎」は、寛政五年では「吉次」に当たっているが、左下端部が虫喰いのため料紙が破損しているため、不明である。（「長三郎」は、世襲名称である。）

以下、第一枚目以降の内実について検討しよう。

(A)

先ず「登龍江山」と題する詩句が書かれている。

香閣巍然倚翠岑 登臨初識道情□

布峰日色連毫祠 越水流聲雜梵音

縁竹風未疑虎嘯 蒼松雲起作龍吟
怪看此境通天路 忘劫人間五濁心

という七言絶句が記されたあと、

村落近花宮 傳法風塵外 談禪丘叡中
悠然緒有尽 頓得悟真空

という五言律詞が書かれている。
そのあと、再び七言絶句に返る。

又 龍江高聳大湖濱 此地風光絶此倫
珠樹玲瓏乘奥處 妙音樓上暮□□

又 湖東第一古禪房 此日登臨□□□

〈□は料紙が虫喰いのため、不明〉
(以下略)

以下、いずれも達筆ながら、時折り、筆者を変え、時に和風の仮名交り文に交替しつつも、基本的には漢詩・漢文がつづいている。

漢詩には、前述のように「又」とするものが少なくないけれど、時には

「馬郎婦」

「寄友人」

「端午」

といった表題の記せられているものもある。

また

「湍牛」

という表題の記せられているものもある。

また

「因見帝妃情」

と、上欄に書かれたものもあり、そのあと、表題を（上欄ではなく）右側の先頭に記す形に移っている。

「祝聖」

「歳首」

この詩には次のような跋文がある。

「今書（か）東叡王入駕因并記慶（か）」
次いで

「歳晚感懷」

この五言律詩の末尾は

「道嘆方今 誰以魯陽術 〔沈併日〕廻斯」

となつてゐる。

次は

「心経開筵」

「同講了」

「秉矩」

「以拂圓相云」

この紙（裏）の末尾に

「長林寺

丹州馬路 仰山和尚」

とある。固有名詞として注目すべきあろう。

この左側の末尾に

「長遠和上」

という、同じく固有名詞が見える。

「除夕」

そのあと

「又」

「右和」

とあり、この首題の下に

「

(乾か)首座」

そのあと

「又」

「又」

とつづき

「

家海大和尚」

の名が見える。

×

×

このあと、書き手が変り、

「右 雪中(見) 梅花」

のように、詩のあとに「右」として、表題を加えている。さらに